

カーボン・プライシングの種別



種別	さらなる細分化	具体例
排出量取引制度 (ETS)	<ul style="list-style-type: none"> • 自主か／義務か → ボランタリー市場／コンプライアンス市場 • 総量か／原単位か 	<ul style="list-style-type: none"> • 企業のネットゼロ目標宣言（ボランタリー市場） • EU ETSやカリフォルニア州ETS（コンプライアンスでの総量） • カナダや中国のETS（コンプライアンスでの原単位）
	（クレジット制度）	<ul style="list-style-type: none"> • 企業のネットゼロ目標宣言（ボランタリー市場向けを購入） • CORSIA（義務的に購入が必要）
炭素税	<ul style="list-style-type: none"> • 名称は様々 	<ul style="list-style-type: none"> • 日本の地球温暖化対策税

そもそもカーボンプライシングの利点は？



1. 「価格」や排出「量」の管理を通じて削減を促せる
 - 炭素税は「価格」を通じて
 - ETSは排出「量」を通じて
2. 社会全体で効率的な削減ができる
3. 炭素排出に価格が付くことで、排出量削減 = コスト削減という認識の変化を起こす
 - いわゆる外部不経済の内部化

IPCC AR6 統合報告書で示された削減水準



世界全体で「2035年60%削減が必要」

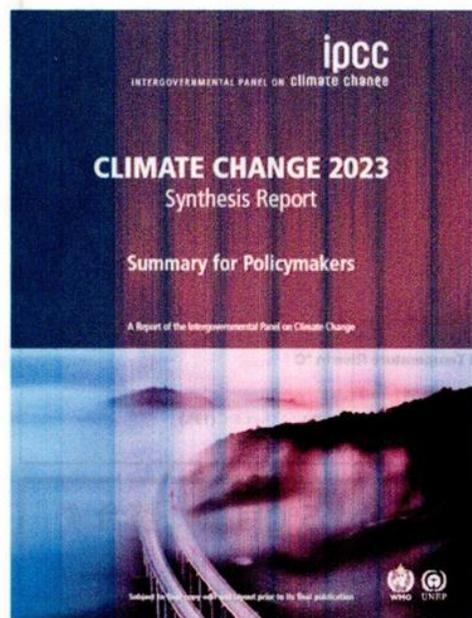


Table SPM.1: Greenhouse gas and CO₂ emission reductions from 2019, median and 5-95 percentiles. (3.3.1, 4.1, Table 3.1, Figure 2.5, Box SPM.1)

		Reductions from 2019 emission levels (%)			
		2030	2035	2040	2050
Limit warming to 1.5°C (>50%) with no or limited overshoot	GHG	43 [34-60]	60 [49-77]	69 [58-90]	84 [73-98]
	CO ₂	48 [36-69]	65 [50-96]	80 [61-109]	99 [79-119]
Limit warming to 2°C (>67%)	GHG	21 [1-42]	35 [22-55]	46 [34-63]	64 [53-77]
	CO ₂	22 [1-44]	37 [21-59]	51 [36-70]	73 [55-90]

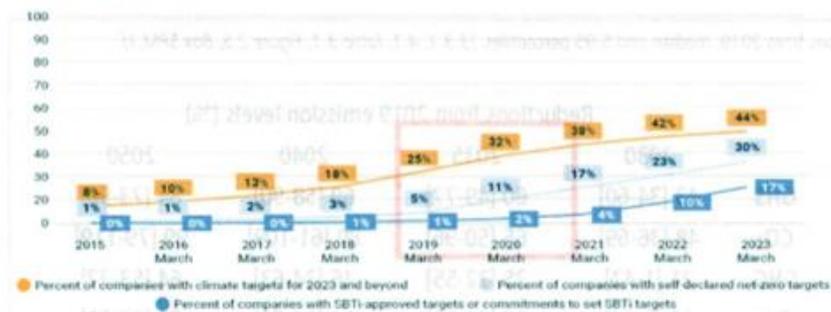
- IPCC第6次評価報告書統合報告書（AR6 SYR）では、気温上昇を1.5°Cに抑制するためには、**2035年までに、温室効果ガス排出量を2019年比で60%削減**することが必要と示された。
- 世界全体では、**トン当たり100ドル以下の削減策で、2030年までに排出量を半減することは可能**であることは、改めて示された。

(出所) IPCC (2023) Climate Change 2023: Synthesis Report (Summary for Policy Makers). <https://www.ipcc.ch/report/ar6/syr/>

目標設定は進んできたが、水準はまだまだ



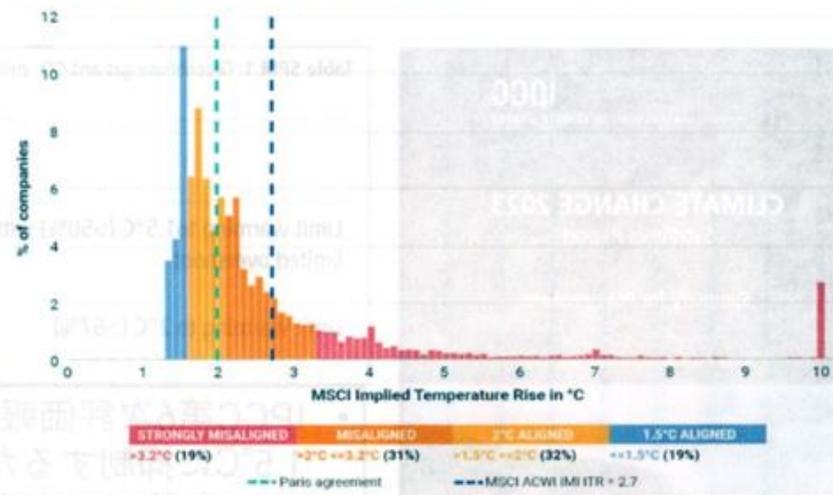
Exhibit 1: More listed companies are setting climate targets, though ambition varies (% of MSCI ACWI IMI)



Source: MSCI ESG Research and CDP data as of March 31, 2023

- 世界的上場企業の中で、短期削減目標をもっている割合は**44%に**。
- SBTi目標の設定にコミット、もしくはすでに承認をとった企業は**17%に**。

Exhibit 5: Listed companies align with warming of 2°C



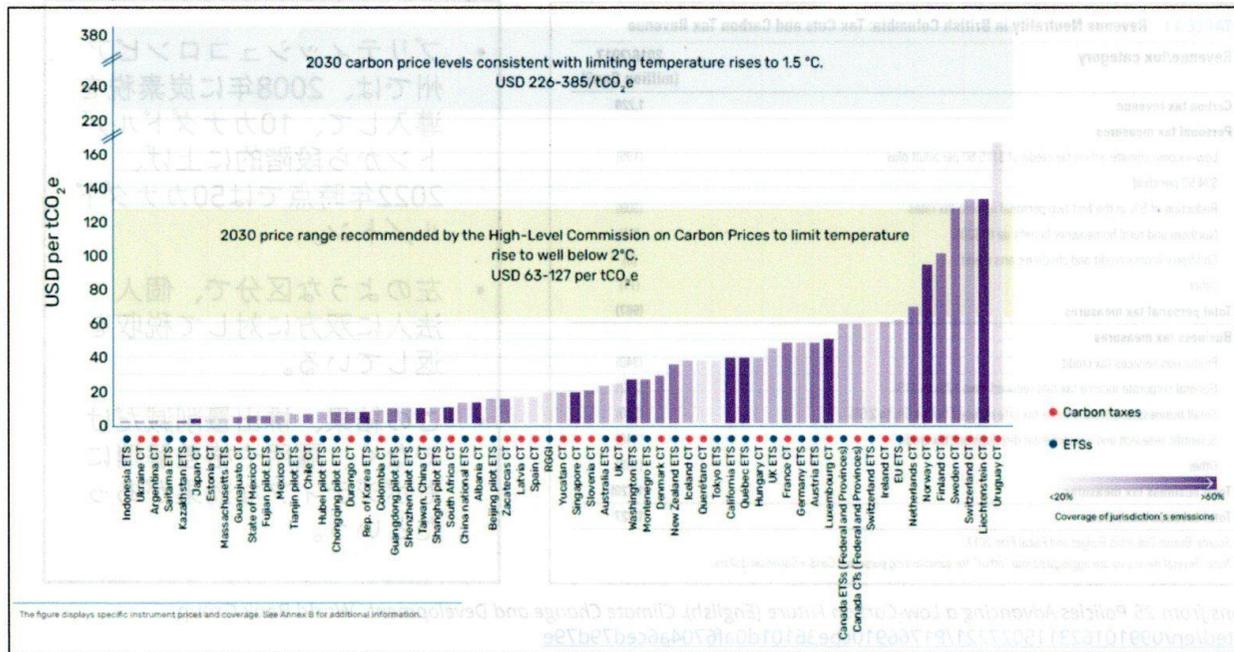
世界的上場企業の中で、**19%しか**1.5°C目標に整合する目標を持っていない。

(出所) MSCI (2023). MSCI Net Zero Tracker. <https://www.msci.com/research-and-insights/net-zero-tracker>

カーボンプライシングの広がり



世界では**75の制度**があり、全体の**24%**の排出量を対象としている



- 1990年にフィンランドで最初の炭素税が導入されて以降、徐々に世界で導入が進んでいる。
- 近年では、ラテンアメリカ諸国や東南アジアなどでも導入が進んでいる。

(出所) World Bank (2024) *State and Trends of Carbon Pricing 2024*. World Bank. <https://hdl.handle.net/10986/41544>

先行する制度から学ぶ：負担の返し方



カナダ・ブリティッシュコロンビア州の炭素税の返し方

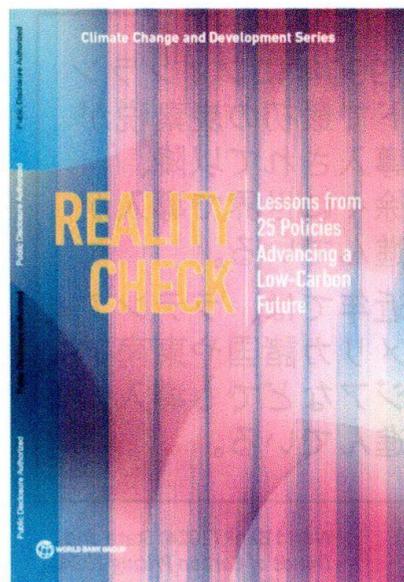


TABLE 3.1 Revenue Neutrality in British Columbia: Tax Cuts and Carbon Tax Revenue

Revenue/tax category	2016/2017 (million Can\$)
Carbon tax revenue	1,220
Personal tax measures	
Low-income climate action tax credit of \$115.50 per adult plus \$34.50 per child	(195)
Reduction of 5% in the first two personal income tax rates	(309)
Northern and rural homeowner benefit up to \$200	(84)
Children's fitness credit and children's arts credit	(8)
Other	(11)
Total personal tax measures	(607)
Business tax measures	
Production services tax credit	(340)
General corporate income tax rate reduced from 12% to 11%	(232)
Small business corporate income tax rate reduced from 4.5% to 2.5%	(230)
Scientific research and experimental development tax credit	(148)
Other	(159)
Total business tax measures	(1,120)
Total revenue measures	1,727

Source: British Columbia Budget and Fiscal Plan 2017.
Note: Several measures are aggregated into "other" for summarizing purposes. Can\$ = Canadian dollars.

- ブリティッシュコロンビア州では、2008年に炭素税を導入して、10カナダドル/トンから段階的に上げ、2022年時点では50カナダドル/トン。
- 左のような区分で、個人・法人に双方に対して税収を返している。
- この結果、排出量削減だけでなく、雇用や格差解消にもポジティブな効果があったという。

(出所) World Bank (2024) Reality Check - Lessons from 25 Policies Advancing a Low-Carbon Future (English). Climate Change and Development. World Bank Group.
<http://documents.worldbank.org/curated/en/099101623115027221/P1766910cbe36101d0af6704a6ced79d79e>

2. 「成長志向型カーボンプライシング」の概要



政府が導入を予定しているカーボンプライシングは「化石燃料賦課金」と「GX-ETS」の2つで構成

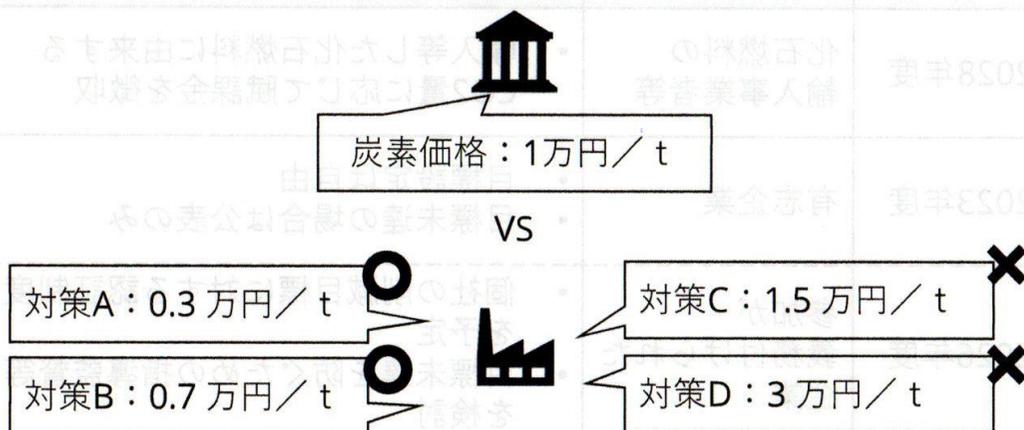
制度		CP種別	導入時期	制度対象	概要
化石燃料賦課金		炭素税	2028年度	化石燃料の輸入事業者等	<ul style="list-style-type: none"> 輸入等した化石燃料に由来するCO2量に応じて賦課金を徴収
GX-ETS	第1フェーズ (GXリーグ)	排出量取引制度	2023年度	有志企業	<ul style="list-style-type: none"> 目標設定は自由 目標未達の場合は公表のみ
	第2フェーズ (「本格稼働」)		2026年度	参加が義務付けられた企業	<ul style="list-style-type: none"> 個社の削減目標に対する認証制度を予定 目標未達を防ぐための指導監督等を検討
	第3フェーズ (特定事業者負担金)		2033年度	発電事業者	<ul style="list-style-type: none"> 発電事業者への排出枠の交付を有償化

3. カーボンプライシングが押さえるべき要点①

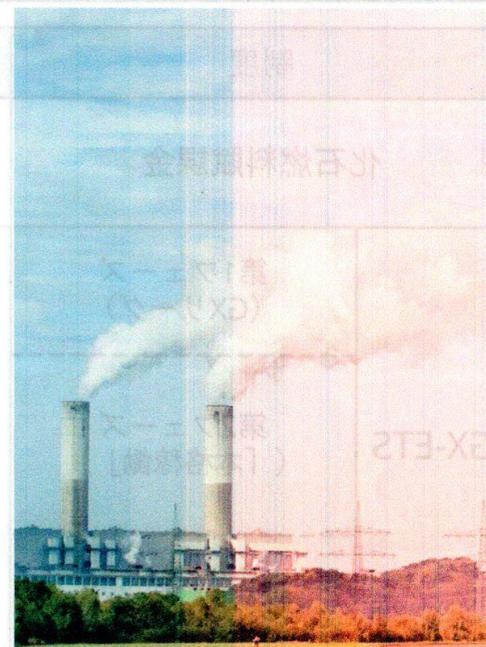


政府収入ばかりを期待せずに、価格シグナルによって排出削減を促す

企業は「炭素価格 > 対策費用」となる排出削減策を順次実施



- 十分な炭素価格にしないと削減を促せない
- 政府収入は副次的で一時的なもの



© Andrew Kerr / WWF



4. 政府の方向性における要改善点①

炭素価格を国際水準に合わせてながらタイミングよく引き上げるべき

<課題>

化石燃料賦課金等の単価に上限をGX推進法で設定

日本政府は...



「当初低い負担で導入し、徐々に引き上げていく」

CPの導入は「エネルギーに係る負担の総額を中長期的に減少させていく中で導入することを基本」

(出典) GX推進戦略



GX経済移行債の支援で削減
CPは償還財源

<改善策>

国際的な水準に段階的に引き上げ
単価上限が妨げになる場合は上限を撤廃



1.5度目標に整合する炭素価格

- 2030年：140ドル（約21,700円）
- 2040年：205ドル（約31,780円）
- 2050年：250ドル（約38,750円）

※1ドル155円で計算

(出典) IEA (2023) "Net Zero Roadmap A Global Pathway to Keep the 1.5°C Goal in Reach", Table 2.2

4. 政府の方向性における要改善点③



GX-ETSでは、対象企業からの総排出量に上限を設けるべき

<課題>

個社による目標設定で
総排出量が十分抑えられるか不透明

各社が削減目標を設定

政府は認証制度・
指導で規律

制度全体の
排出量は
抑えられる？



排出量の実績



抑えるべき水準

<改善策>

対象企業の総排出量に上限（キャップ）
を設けて、経時的に縮小

キャップの範囲で
排出枠を発行

総排出量を
キャップ以下に
できる可能性大

翌年は
キャップを縮小し
更に削減を進める

